

# 看護教諭養成における臨床実習からの学生の学び

鈴木 裕子

## I はじめに

看護教諭の免許状を取得するための要件を示した教育職員免許法施行規則第9条には「看護に関する科目」のひとつとして、「看護学（臨床実習及び救急処置を含む）」（最低修得単位数10単位）が定められている。しかしこの「看護学」について単位の内訳等の規定はなく、「臨床実習」「救急処置」を含めて、どのような科目を何単位開設するかは各大学に任されている。そのため、従来から国立の教育学系大学では「看護学」の科目として臨床医学系科目が多く開設されている<sup>(1)</sup>、看護系大学では看護師養成のための専門教育科目と「看護に関する科目」との区分が不明確である<sup>(2)</sup>という報告がみられるなど、履修科目には大学によるばらつきが大きいことが指摘されている。

本稿でテーマとする「臨床実習」は、この「看護学」に含まれる位置づけであるが、これについても同様に明確な基準や指針はなく、「臨床」の範囲の解釈もさまざまである。

看護教諭養成における臨床実習は、一般に「看護が行われるあらゆる場で直接、患者、家族等に接する実習」<sup>(3)</sup>と解釈され、医療機関での実習として設定している大学が多い。しかし実習先、実習期間、実習内容は大学によって多様な実態があることが報告されている<sup>(4)</sup>。その背景には、「臨床実習で何を目標にし、何を実際に体験させるかが明確になっていない」「看護師にならない者が看護学の臨床実習を行うことから、臨床の場を提供している医療機関からの協力を得ることが難しい」<sup>(5)</sup>という状況がある。

看護師養成における医療機関実習は、看護基礎教育の一環として「臨床実習」という名称で明確に位置付けられている。保健師助産師看護師学校養成所指定規則第4条（別表三）により、臨

地実習の単位数は計23単位のべ1,035時間（専門分野Ⅰにおいて3単位、専門分野Ⅱにおいて16単位、統合分野において4単位）と定められており、さらに「看護師等養成所の運営に関する指導ガイドライン」（2015年3月までは「看護師等養成所の運営に関する指導要領」）によって、指導内容や指導者の資格、留意事項等が細かく指定されている。

それに対して養護教諭の養成課程における看護学の臨床実習は曖昧であるため、医療機関側は「実習を受け入れるにあたり、とまどいがある」<sup>(6)</sup>といわれている。それだけでなく「看護学生の実習は病院の人材確保に直結するが、養護教諭学生の実習は、受け入れ施設にとって負担の割にメリットが少ない」ことから、実習施設の確保が困難であるという指摘<sup>(7)</sup>もある。

国土館大学文学部の養護教諭養成課程は、2008（平成20）年度から教育学専攻に新たに設けられた。文部科学省の教職課程認定に際し、「臨床実習」に相当する科目としては、3年次の「看護実習Ⅱ（事後指導を含む）」（1単位）が認められている（2015年度より名称を「看護実習2」に変更<sup>註</sup>）。

この実習が実際に始まったのは、2008年度の第1期入学生が3年次を迎えた2010年度であり、2015年度で6年目を迎えた。

実習を開始し、現在の実習方法に至るまでには、さまざまな課題があった。実習先の開拓、実習の目的や目標の設定、実習期間や実習の方法・内容についての実習施設との調整など、多くの調整と検討を行ってきた。しかしそれらの経過および成果についてこれまで十分な整理・検証を行ってきたとは言い難い。

そこで本稿では、まず2010（平成22）年度に本専攻で初めて臨床実習を開始するまでと、その後現行の実習機関での実習が定着するまでの経過について、当時の記録をもとに整理する。

そして、今後の実習の一層の充実を図るための資料となるよう、実習を経験した学生がそこから得た学びの内容を実習後の感想の記述から抽出することを目的とする。

## Ⅱ 実習開始に至る経過

2008年度に養護教諭養成課程を開設して以来、3年次の臨床実習に向けた実習先の開拓は大きな課題であった。またその前提として、依頼する内容、すなわち実習の目的や依頼したい実習像を検討することも必要であった。それらの経過を表1に整理した。

まず、すでに養護教諭養成課程を開設している複数の養成機関と連絡をとり、実習に関する資料の提供を依頼し、実習内容や実習先について情報を収集した。それらの資料及び先行研究等を分析し、実習の目的や依頼したい実習内容等を検討し、依頼文書を作成した。養成機関の中には大学付属の医療機関のあるところもあったが、多くは知人を介して紹介を受けたり、担当教員が飛び込みで依頼したりして実習先を開拓していた。

それらの情報を基に、養護教諭の学生の受け入れ経験のある近隣の複数の医療機関に打診したが、新たな受け入れは難しい状況があった。そこで本専攻の教員が学会等で交流のある医師や、区の医師会を通して地域の医療機関や総合病院等を紹介してもらい、いくつかの医療機関に実習の依頼を行った。しかし実習の受け入れが可能な医療機関を見つけることは困難であった。この時期は学内で「看護実習Ⅰ」を行うための実習室がまだなかったため、体育学部の実習施設・大学健康管理室・初等教育専攻の家庭科室又は理科室を借用することの検討、養護実習室の新設のための各種調整等も並行して行っており、実習先の依頼を迅速に進めるのが困難な状況もあった。

医療機関の中には、実習に協力できるよう、窓口となった管理職や事務担当職員が積極的に調整の努力をしてくれたところもあった。しかし多くの医療機関で、看護学の実習として不可欠である看護担当部門（看護部等）の協力を得るのが困難な状況がみられた。その理由として、先行研究等で示されている次のような課題と同様の傾向があったと考えられる。

臨床看護の現場は元来多忙である。そこに看護師養成の実習のほか多様な実習生を既に受け入れており、さらに新たな実習生を受け入れることは本来の業務に影響が生じる。特に病棟での現場

指導に当たる指導者の人的な負担が大きく、実習指導体制を整えることが困難である。また看護師養成の実習のように目的・目標や内容が明確でないため大学と調整して独自の実習計画を立てなければならない。

初年度（2010年度）に実習を行ったG病院では、それらの課題を解決できるよう努めてくださった。しかし翌年度以降の継続実施をお願いすることはできなかった。

そのため2010年度の秋以降、新たな実習依頼先をさがすこととなり、最終的に医療・福祉の分野で第一線の指導的立場にあったI氏がかかわるK病院に2011年度からの実習をお願いすることとなった。

K病院は、理事長、病院長はじめ事務局長、担当職員すべてのスタッフが充実した実習となるよう病院全体で協力体制をとってくださり、病院内の様々な部門で、担当者から直接説明を受け、見学・実習をすることができた。そして2011年度以降2015年度の現在まで5年間、よりよい内容となるよう改善に努めながら、基本的にほぼ同様の形態・内容で実習を継続できている。

表1 2010年度、2011年度の実習実施までの経過

月日	内容
2008/4～	養護教諭養成課程における臨床実習の実態について情報収集を行う
2009/3～	東京及び近郊の養護教諭養成機関7校に臨床実習に関する資料提供を依頼
2009/5～	養護教諭の臨床実習受け入れ経験のある病院A～Dに新規実習受け入れについて打診する
2009/6/18	世田谷区の小中学校の学校医等の診療所での見学実習を検討
2009/8/1	世田谷区教育委員会学校健康推進課長を通して世田谷区医師会をご紹介いただく
2009/8/12	世田谷区医師会、世田谷区歯科医師会を訪問し、実習の依頼を行う
2009/9/7	世田谷区医師会の依頼により正式な依頼状を作成
2009/10/1	医師会及び実習機関等への謝礼金について検討を行う
2009/12/24	世田谷区医師会より、実習可能な小児科医院等がなく受け入れが難しくあるとの連絡 関連する複数の総合病院の紹介を受ける
2009/12/25	紹介を受けた大田区E病院、渋谷区F病院に連絡し概要を伝える E病院からは困難であるとの回答 世田谷区G病院を訪問し説明を行う
2010/1/10	渋谷区F病院より困難であるとの回答 体育学部との連携や、福祉施設での実習も視野に入れた検討について学部長と相談する
2010/2/17	世田谷区G病院に再度依頼に行く
2010/3/5	G病院より、具体的な検討を進めているとの連絡あり
2010/4/30	G病院にて打ち合わせを行うj
2010/5/6	G病院（看護部）より実習の目的・目標の明確化について指摘される
2010/6/17	G病院の実習スケジュールや具体的内容を打ち合わせ
2010/8/9	この日からG病院にて1週間の実習を行う
2010/10/25	G病院と今後の実習について相談（病棟実習の困難性、日数短縮等について）
2010/11/29	G病院より、看護学生実習優先のため次年度の実習が困難であるとの連絡
2010/11/30	港区H病院、国立J病院に実習の可能性を打診する
2010/12/4	医療・福祉分野で指導的立場にあるI氏を訪問し医療機関の紹介をお願いする 葛飾区K病院を紹介していただく
2010/12/17	港区H病院に再度依頼を行うj
2010/12/18	院内学級のある病院を調べて可能性を検討する
2010/12/22	港区H病院より、人数や日数の点で受け入れが困難であるとの連絡 国立J病院は国立看護系大学以外の受け入れは不可能であるとの連絡
2011/1/19	葛飾区K病院を訪問し正式な依頼
2011/2/1	葛飾区K病院を再度訪問し依頼内容を説明、実施の方向で検討していただく
2011/2/22	K病院紹介のお礼のためI氏を訪問
2011/3/31	K病院と連絡をとり実習日程等について打ち合わせる
2011/5/9	K病院と事前指導について連絡を取る
2011/7/26	K病院と最終打ち合わせ
2011/8/15	この日からK病院にて2班（5日間×2）の実習を行う
2011/9/9	実習のお礼および次年度以降の実施について連絡をとる
（以後の経過省略）	

### Ⅲ 現在の実習の概要

他の養護教諭養成機関の実習要項や先行研究を参考に検討し、以下のような実習の目的や目標を設定している。日程は大学の長期休業期間中に設定できるよう K 病院と調整して決定し、K 病院の計画に基づいて実施している。

#### 1) 実習の目的

- ① 病院の施設設備や各部門のスタッフの動きを見学し、医療機関への理解を深める。
- ② 診療や看護の過程の見学、患者様やその家族と接することなどを通して、さまざまな障害疾病への理解を深める。
- ③ 健康問題のある子どもを適切に医療につなぎ、学校と医療機関のよい連携のもとに健康をサポートできる養護教諭としての資質を養う。

#### 2) 実習の具体的目標

##### <医療機関の理解>

- ・病院の機能、施設設備、組織、スタッフの構成と業務内容を知る。
- ・外来診療の流れ、各診療科の特色を知り、医療機関を正しく利用できるようにする。
- ・入院生活の実際やそれを支えるチームについて知る。

##### <障害疾病の理解>

- ・さまざまな疾患とその症状、それに対する処置や看護の内容、患者様の反応等を見学することにより、保健室でのアセスメント、応急手当、ケア、保健指導等に生かせるようにする。
- ・さまざまな健康レベルにある人々の心身の状態について理解し、医師や看護師の患者様への接し方から、養護教諭としての接し方を学ぶ。

##### <医療機関と学校の連携についての洞察>

- ・見学等を通して、医療を必要とする子どもへのよりよいサポートのあり方、医療機関と学校のかかわり方について考えられるようにする。

### 3) 実施時期と形態

3年次春期集中「看護実習Ⅱ（事後指導を含む）」（1単位）として設定している。各年度の実習生の人数により4～6名の班編成を行い、班ごとにそれぞれ夏季休業期間中の1週間（月～金曜日の連続した5日間）行っている。5日間の実習の前後に事前（直前）指導と事後指導を各1コマ行う（表2－1）。実習に必要な知識の確認を含めた事前課題を設定し、実習までに各自で取り組む。

表2－1 看護実習Ⅱの構成

	時 期	内 容
事前（直前）指導	実習の約1か月前に1単位時間	実習オリエンテーションと実習までの事前学習課題提示
臨床実習	医療機関での1週間の実習	医療機関の計画（表2－2）に基づく実習
事後指導	実習後1ヶ月以内に1単位時間	実習の振り返り（個人・グループワーク）と成果の発表

5日間の実習は、K病院の総務課担当職員の調整により綿密な計画が立てられ、それに基づいて各部門担当者による直接の指導が行われる（表2－2）。「講話」、「見学」、「体験活動」、「補助的実技」などさまざまな内容が工夫して取り入れられている。現場実習は、看護部長を中心に病棟看護師の指導のもと入院患者とコミュニケーションをとりながらバイタルサインの測定等を行う。毎日終了時に振り返りの時間があり、その日に学んだことを確認し、共有する。その場で看護部長や実習担当職員、大学の担当教員からのコメントや補足指導が行われる。

実習終了後は実習日誌を整理して提出するとともに、事後指導として、個人および班ごとの振り返りを行い、他のグループに向けて発表する。最後に担当教員から指導を行う。

表2-2 K病院の実習計画（例）

日程	時間	内容	担当部門責任者	備考
1日目(月)	9:30～10:00	理事長あいさつ	理事長	
	10:00～10:30	A病院の概要	事務長	各部署の機能
	10:30～11:00	実習オリエンテーション	看護部長	
	11:00～12:00	病院内見学	総務課員	
	12:00～13:00	昼食休憩(職員食堂)		
	13:00～14:00	看護について	看護部長	
	14:00～15:00	透析について	透析センター長	ダイヤライザー模型使用
	15:00～15:30	リハビリについて	理学療法士	
	15:30～16:00	1日の振り返りとまとめ		
2日目(火)	9:30～11:00	OPE見学	看護部長	
	11:00～11:30	病院長あいさつ	病院長	
	11:30～12:00	現場実習	看護部長	
	12:00～12:30	栄養管理について	栄養科長	
	12:30～13:30	昼食休憩(職員食堂)		
	13:30～14:00	薬剤科について	薬剤科	
	14:00～15:00	心肺蘇生法について	送迎課職員	
	15:00～15:30	医事課	医事課長	
	15:30～16:00	1日の振り返りとまとめ		
3日目(水)	9:30～10:00	清掃課について	清掃課主任	感染に配慮した清掃
	10:00～11:00	現場実習	看護部長	
	11:00～12:00	薬剤科実習	薬剤科	
	12:00～13:00	昼食休憩(職員食堂)		
	13:00～13:30	現場実習	看護部長	
	13:30～14:00	歯科について	歯科口腔外科医長	
	14:00～14:30	医療機器について	臨床工学科主任	
	14:30～15:00	現場実習	看護部長	
	15:00～15:30	リハビリについて	リハビリ科長	
	15:30～16:00	1日の振り返りとまとめ		
4日目(木)	9:30～10:00	放射線科について	放射線科主任	放射線、PTAについて
	10:00～10:30	血液検査について	臨床検査科長	
	10:30～11:00	生理検査科	生理検査科長	
	11:00～11:50	現場実習	看護部長	
	11:50～12:30	NST回診	栄養科長	
	12:30～13:30	昼食休憩(職員食堂)		
	13:30～14:30	褥瘡回診	看護師長	
	14:30～15:30	透析について	臨床工学科長	
	15:30～16:00	1日の振り返りとまとめ		
5日目(金)	9:30～11:30	PTA見学	看護部長	
	11:30～12:00	地域医療連携について	MSW	
	12:00～13:00	昼食休憩(職員食堂)		
	13:00～14:00	現場実習	看護部長	
	14:00～15:00	感染について	副院長	
	15:00～16:00	1週間の振り返りとまとめ		



## Ⅳ 実習からの学生の学びの抽出

### 1) 対象

2011年度から2015年度までの5年間に、K病院で実習を行った学生計72名が実習後に記入し提出した感想文を分析した。各年度の実習期間、人数等は表3のとおりである。この5年間は、同じ医療機関において、ほぼ同一の内容・日数で実習を行ったため、年度による比較を行わず、全ての感想文を一括してデータとした。学生はいずれも文学部教育学専攻で養護教諭免許状取得を希望する3年生である。

実習機関であるK病院は、葛飾区にある病床数60床（一般病棟26床、療養病棟34床）の一般病院である。特色として、74床の透析ベッドを備えた透析センターを有し、透析治療を中心とした内科診療を行っている。また歯科・口腔外科を有し、全身疾患等の有病者の歯科治療を行うほか、リハビリテーションや緩和ケアにも力を入れている。

表3 対象とした実習期間と学生数

年度	実習実施期間	実習生人数
2011 年度	2011/8/15～2011/8/26のうち5日間	9 名
2012 年度	2012/8/6～2012/8/31のうち5日間	21 名
2013 年度	2013/8/5～2013/8/23のうち5日間	15 名
2014 年度	2014/8/4～2014/8/22のうち5日間	15 名
2015 年度	2015/8/3～2015/8/21のうち5日間	12 名
		計 72 名

### 2) 分析方法

学生が記述した感想文の記述内容を読み取り、質的内容分析の方法<sup>(8)</sup>を用いて分析した。分析は次の手順で行った。①収集した感想文を、誰が記述したのか判別できないよう処理したうえで、それぞれの記述を意味ある文章や内容ごとに切片化した。②各切片を、実習内容等の事実を記述したものと感想を記述したものとに区分し、感想にあたるものをコード化した。③コードの内

容を比較検討し、意味内容が類似したものをまとめてラベルをつけ、サブカテゴリーとした。④類似したサブカテゴリーをまとめ、さらに抽象度を挙げたラベルをつけてコアカテゴリーとした。

### 3) 倫理的配慮

分析に当たっては全ての資料の記入者氏名を消去し、個人を特定できないように処理したうえでデータを扱った。資料は本研究以外の目的には使用せず、他者が閲覧できないよう厳重に保管を行った。

### 4) 結果

学生の記述を分析した結果、感想に相当する文章の切片が約450抽出された。それらを整理した180のコードを類似するものでまとめた結果、40のサブカテゴリーと10のコアカテゴリーが抽出された。（表4）

#### ①病院の機能やシステムの理解

このカテゴリには、「病院ではさまざまなスタッフが組織的に働いている」「それぞれの部門が担う役割」「病院と地域とのかかわり」の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

「さまざまなスタッフ」には医師、看護師だけでなく、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、作業療法士、診療放射線技師、臨床工学技士、MSWなどの専門職、そして送迎課や清掃課の職員まで様々なスタッフがおり、それぞれがなくてはならない重要な仕事を担っていることに気づき、その業務に関心を持つことができていた。また病院が患者のためだけでなく社会的貢献をしていることを知り、それまで持っていた病院のイメージが変わったという記述も見られた。

#### ②チーム医療の理解

このカテゴリには、「いろいろな職種が連携してかわることの意義」「情報を共有する必要性」「良い仕事を進める背景にあるもの」の3つのサブカテゴリーが含まれていた。

表 4 臨床実習からの学生の学び

サブカテゴリ	コアカテゴリ
病院ではさまざまなスタッフが組織的に働いている	病院の機能やシステムの理解
病院の様々な部門が相互役割	
病院と地域とのかわり	
いろいろな職種が連携してかわるこの意義	チーム医療の理解
情報を共有する必要性	
良い仕事を進める背景にあるもの	
患者の気持ちの理解	患者の気持ちや疾病の理解
透析治療のつとさ	
健康な生活習慣の大切さ	
手術室の印象	
患者へのきめ細かな配慮	患者に接する態度
患者への思いやり	
患者とのコミュニケーションの大切さ	
バイタルサイン測定の難しさ	バイタルサイン測定等の技術
バイタルサイン測定の自信	
環境整備の重要性	感染予防や食事の大切さ
清掃の仕事の大切さ	
感染防止の重要性を意識	
病院食の工夫と食事介助の考え方	
食事をきちんととる意味	
人間の体の素晴らしさ	生命のすばらしさやそれを守ることの意義と方法
血管から感じた生命	
楊瘡を見た驚き	
救急法や応急手当の意義や方法の理解	
防災訓練での学び	
人の命にかかわる仕事の責任の重さとすばらしさ	仕事に臨む姿勢
ミスが許されない緊張感	
誇りと責任を持って仕事をするこの魅力	
仕事をするうえでの心がけ	
障害のある職員の働き	
病院と学校の共通点	養護教諭の仕事に生かしたいこと
チームを意識した仕事	
子どもを大切にすること	
実習で学んだことを生かす	
患者とのコミュニケーションから学んだこと	全体を通した感想と感謝の気持ち
職員の話の理解	
職員の話や態度への感謝の気持ち	
印象に残った話	
総合的に感じること	
充実した実習への感謝の気持ち	

全てのコードの中ではこのカテゴリに関する記述が最も多かった。カンファレンスや回診の見学で、話に聞いていた「チーム医療」の実際を目の当たりにし、様々な視点から意見を出し合うことがより良い医療につながることを実感として強く感じていた。「ピラミッド型でなく患者を中心に円型になっているという話が印象的だった」との記述も見られた。またその際に相互の信頼関係を

築き、情報を共有して協力し合うことの大切さにも気づいていた。

### ③患者の気持ちや疾病の理解

このカテゴリには、「患者の気持ちの理解」「透析治療のつらさ」「健康な生活習慣の大切さ」「手術室の印象」の4つのサブカテゴリが含まれていた。

手術室や透析室の見学は、独特の空気を非常に貴重な経験として受け取め、強く印象づけられたようであった。またストレッチャーや手術台に横になって患者の気持ちになってみたり、患者から病気について直接話を聞いたりするなかで、疾病のケアの大変さを知り、疾病の予防の大切さを実感していた。

### ④患者に接する態度

このカテゴリには、「患者へのきめ細かな配慮」「患者への思いやり」「患者とのコミュニケーションの大切さ」の3つのサブカテゴリが含まれていた。

医師や看護師等の患者への接し方を見て気づいたさりげない配慮や、思いやりを持った言動、明るい表情などが患者に安心感を与え、信頼関係づくりにもつながることに気づき、心がけたいと考えていた。さらに患者一人一人の状況をよく把握しておくこと、本人の話をよく聞き、コミュニケーションをとりながら対応することも大事であると考えていた。

### ⑤バイタルサイン測定等の技術

このカテゴリには、「バイタルサイン測定の難しさ」「バイタルサイン測定の自信」の2つのサブカテゴリが含まれていた。脈拍や血圧の測定は学内実習において学生同士で練習していたものの、初めて高齢の患者に対して行くとまどったことや、年齢による正常値の違い、毎日継続することで徐々に自信がついたことなどが記述されていた。

### ⑥感染予防や食事の大切さ

このカテゴリには、「環境整備の重要性」「清掃の仕事の大切さ」「感染防止の重要性を意識」「病院食の工夫と食事介助の考え方」「食事をきちんと取る意味」の5つのサブカテゴリが含まれていた。疾患をもつ患者にとって身の回りの環境を整えることや食事の大

切さ、そのための食事形態や食事介助の配慮など、見学を通して気づいたことが記述されていた。さらに副院長の講話や実技を通してスタンダードプリコーションを意識したり、自分の勉強不足を感じたりしたようであった。

#### ⑦生命のすばらしさやそれを守ることの意義と方法

このカテゴリには、「人間の体の素晴らしさ」「血管から感じた生命」「褥瘡を見た驚き」「救急法や応急手当の意義や方法の理解」「防災訓練での学び」の5つのサブカテゴリが含まれていた。

シャント手術の見学で血管を初めて見て、その弾力や強さに驚いたり、血管を勢よく流れる血液やシャントの音から生命の力強さを感じ、生きていることの実感、体の仕組みの巧妙さに感心した内容の記述が多くみられた。そして救急救命の経験ある職員から心肺蘇生法等の指導を受け、命を守るために進んで自信をもって行えるようになろうと決意を固めていた。さらにその他の外傷の応急手当や、歯科では歯牙破折の対応の話などを聞き病院を受診する前に学校ですべきことについて理解を深めていた。褥瘡回診で褥瘡を目にしてケアの大切さにも気づいていた。実習中にちょうど防災訓練を経験できたグループは消火器や消火ホースを手にした感想を記述していた。

#### ⑧仕事に臨む姿勢

このカテゴリには、「人の命にかかわる仕事の責任の重さとするばらしさ」「ミスが許されない緊張感」「誇りと責任を持って仕事をするものの魅力」「仕事をするうえでの心がけ」「障害のある職員の働き」の5つのサブカテゴリが含まれていた。

「病院の仕事は命を扱う責任の重い仕事だが、やりがいのあるすばらしい仕事でもある」といった記述が多数あり、医療職に興味を持つ学生もみられた。また医療職に限らず「職員がそれぞれの仕事に誇りを持ち、責任感を持って生き生きと働く姿に魅力を感じた」「このような素敵な社会人になりたい」と憧れをもつ学生もいた。障害のある職員の見事な仕事ぶりに感心したり、「目標や向上心を持って仕事に臨むことが大切」「自信をもてるように知識を身につけたい」など、仕事に向かう姿勢について意識す

る機会にもなっていた。

#### ⑨養護教諭の仕事に生かしたいこと

このカテゴリには、「病院と学校の共通点」「チームを意識した仕事」「子どもを大切にする」「実習で学んだことを生かす」の4つのサブカテゴリが含まれていた。

「患者や子供を中心として関係者がそれぞれの視点から働きかける」「人の命にかかわる」「地域に密着し相互に支え合う」「関係者と共通理解を図り連携して組織的にサポートする」など病院の仕事と養護教諭の仕事の共通点を見いだしていた。そして「一人一人を大切にする患者への接し方を真似したい」「感染症やけがの予防を指導していきたい」「慢性疾患を持つ子供のサポートをしっかりしたい」など実習の成果を将来養護教諭として生かしたいという意欲が多数記述されていた。

#### ⑩全体を通した感想と感謝の気持ち

このカテゴリには、「患者とのコミュニケーションから学んだこと」「職員の話の理解」「職員の話や態度への感謝の気持ち」「印象に残った話」「総合的に感じること」「充実した実習への感謝の気持ち」の4つのサブカテゴリが含まれていた。

「毎日同じ患者さんと接することで親近感がわいた」「日を追うごとに笑顔や言葉数が増えてきてうれしかった」「人生の先輩としていろいろな話を聞けた」「逆に励まされ元気をたくさんもらった」など、患者とのコミュニケーションを通して人とのかわりの心地よさを感じた学生が多かった。

毎日交代で講話や指導に当たってくれた各部門のスタッフに対しても、「話の内容が丁寧で充実していた」「直接の担当者の話は現実感があった」「養護教諭に役立つ内容を考えてもらえてうれしかった」「笑顔で気さくに声をかけてくださりとても感じがよかった」などの感謝の気持ちが多く記述されていた。「社会に出てからも毎日が勉強」「失敗してもくじけずにチャレンジする心が大切」という理事長の講話も心に残ったようである。

総合的に振り返り「生きる事の尊さや、普段当たり前に思っている健康のありがたさを学んだ」「人の温かさに触れることがで

き素晴らしい経験だった」「コミュニケーションの大切さを身に染みて感じた」「病院の皆さんの熱意に負けないよう目標を持って頑張りたい」「養護教諭の勉強だけでなく人間として成長できた」と、感謝と共に人として大きな影響を受けたことが記述されていた。

## 5) 考察

養護教諭の職務には、保健管理（児童生徒の心身の健康管理および学校環境衛生管理）、保健教育、健康相談、保健室経営、保健組織活動等があり、これらの遂行のために医学・看護学の知識・技術を欠かすことはできない。しかし臨床実習に関しては、実習内容が実習機関によってまちまちであり、十分な学びを得ていない例もある。大谷らは「ただ立っているだけという見学だけの実習」「学生が何も動けないで肩身の狭い思いをしながら過ごしている」というような実習の実態について述べている<sup>(5)</sup>。

しかし本研究で対象としたK病院の実習に対する学生の感想は、総じて肯定的な内容の記述ばかりであった。中には「始めは『養護教諭の勉強で病院実習？』って思ったけれど、実習を通して養護教諭になるために病院実習が必要な理由がよくわかった」という感想もあった。

カテゴリー⑨にも示されたように、学生は病院と学校の共通点を数多く見だし、将来養護教諭としてどのように生かせるかを考えていることがわかる。その結果、養護教諭には直接関連のなさそうな業務の見学や実習にも関心をもって臨むことができていると考えられる。その理由として、各部門の担当者による講話や毎日の振り返りの時間の話の中で、意識的に養護教諭と関連づけた内容をお話くださり、学びの意味づけがなされていることが挙げられる。

またK病院が理事長や病院長を筆頭に実習生を好意的に受け入れ、多忙な中、できる限り時間をとって学生とコミュニケーションをはかり、学生の質問や希望に対応してくれていることも大きい。永石らは、ノディングスによるケアリング教育の方法や安酸

史子の経験型実習教育の考え方を養護教諭の臨床実習指導に取り入れ、学生との対話を重視した結果、実習に臨む姿勢が改善され、実習後の自己効力感も高まったことを報告している<sup>(9)</sup>。今回の学生の記述の中に「職員の方との雑談の中でも学べるものがたくさんあった」というものがあり、こうしたK病院のスタッフと実習生との交流が実習の効果に良い影響をもたらしたことは十分に考えられる。また、学内における実習の事後指導においても、学生同士、学生と教員間の交流を多くとりいれている。これが実習後の学びの定着に効果があった可能性も考えられる。

コアカテゴリの中で学生の記述が最も多かったのは、②「チーム医療」に関するものであった。これは①の「病院の機能やシステムの理解」に次いで医療機関から学んでほしい観点であった。医療機関ではかねてからチームで仕事をすることが定着しており、すでに1988年に飯田らが「（臨床実習において）保健医療チームの連携がどのようになされているかを知ることが必要である」<sup>(10)</sup>と述べている。さまざまな課題を抱える学校現場でも近年やっと「チーム学校」の概念が強調されるようになってきたところである<sup>(11)</sup>。養護教諭は学校の子どもの健康問題の解決に当たり、校内の連携および地域の医療関係者や関係機関との連携に際してコーディネーターの役割を担うことが求められている<sup>(12)</sup>ことから、実習を通してチーム医療から得た学びを生かしていくことが期待される。

③患者の気持ちや疾病の理解、④患者に接する態度、⑤バイタルサイン測定等の技術などのコアカテゴリは、病棟での患者との交流や看護師をはじめとする職員の患者との接し方などから学んだことである。飯田らは「病気を持った患者に接する機会は臨床実習でしか得られず、教科書では学べない貴重な体験をすることができる」<sup>(10)</sup>とも述べているが、この実習でまさにその生きた学びが得られたといえることができる。本田らの国立大学の養護教諭養成課程卒業生への調査<sup>(13)</sup>によると、実習中の「バイタルサインの観察」の学習経験率は共通して高く、就職後の応用経験率や対処時の自信も高いが、一方で「患者とのコミュニケーション」



については自信がもてず学習ニーズが高いことが指摘されている。K病院の実習では、患者と毎日コミュニケーションをとり、バイタルサインの測定も繰り返し行うことによって自信がついた学生が多かったことから、短い期間の中で効率的にこれらの学びを得ることができたと考えられる。⑩に含まれるサブカテゴリ「患者とのコミュニケーションから学んだこと」にも多くの学びが記述されており、実習の大きな成果のひとつであったといえる。

⑥の感染防止や食事等の生活の援助は、看護の最も基本となる項目であり、臨床実習の学びのひとつとして重要である。臨床の現場と結びつけて考えることで、既習の知識が曖昧であったことに気づき、学びへの意欲を高めることにもつながっていた。

⑦、⑧、⑩のコアカテゴリからは、実習を通して単に養護教諭免許取得のための学びを超えて、生命に対する畏敬の念や職業観や人生観にも影響を与えるような広い学びを得たことが読み取れる。特定の場面や話の内容からというよりは、疾病と向き合う患者の姿や、生命にかかわる仕事に誇りと自信をもって働く職員の姿に尊敬の念や憧れを感じたものと推察できる。感想の最後に「この病院で実習ができて本当によかった」「ここで学んだことは私の宝物です」などの記述も非常に多くみられ、患者本位の理念が隅々までいきわたったK病院での実習が充実したものであったことがうかがわれた。

養護教諭養成における臨床実習は、医療分野への入職をめざしたインターンシップではなく、単なる体験活動でもない。養護教諭をめざす学生にとって実習の目的が自覚でき、意義ある実習となるよう、これからも学生の学びの状況を把握しながら、事前事後指導を含めた実習内容の検討を行っていく必要がある。

## 6) 研究の限界と今後の課題

本研究は、ひとつの医療機関で行った実習の感想のみをデータとして分析したものである。また質的分析に際して、特定の理論に基づく緻密な分析をしておらず、第三者による妥当性の検証も十分とは言えない。そのため臨床実習に関する一般的・客観的な

結果が得られたとは言い難いが、養護教諭養成としての臨床実習の一定の意義を示すことはできたと考える。

しかし臨床実習において習得すべき内容と到達度の基準が国として明確にされていないことから、各自の実習の成果、とりわけ到達度の評価に課題がある。今後は、この学びが養護教諭としてどのように生かされたかを検証し、それをふまえた到達目標の設定や、具体的な評価基準・評価方法を検討していく必要がある。

なお、実習生の人数はこの5年間10～20名程度で推移し、全員がほぼ同条件で実習を行うことができたが、今後もし人数が大幅に変動するような場合には、実習形態や実習機関の数なども検討する必要があるだろう。

## 謝辞

実習生を快く受け入れ、ご多用の中貴重な時間を割いて丁寧なご指導をくださいましたK病院の理事長様、病院長様をはじめ職員の皆様、実習にご協力くださり学生にあたたかい言葉をかけてくださいました患者の皆様にご心よりお礼申し上げます。また実習指導をご担当くださっている非常勤講師の関ひろ子先生にも、この場を借りてお礼申し上げます。

## 註

「看護実習Ⅱ」から「看護実習2」に変更された理由は、「看護実習2」の履修要件に「看護実習1」の修得を含めるためである。医療機関での実習を行う前に学内での看護実習の単位を修得する必要があるのは当然であるが、科目名としてそのことを示すために2015年度から「看護実習1」「同2」の名称を用いることとした。

## 文献

- (1) 大谷尚子他：養護教諭養成教育のカリキュラム構造に関する研究、日本養護教諭教育学会誌2(1)、12-23、1999
- (2) 後藤ひとみ他：養護教諭養成における看護系四年制大学の

- カリキュラムに関する一考察、日本養護教諭教育学会誌4(1)、89-99、2001
- (3) 中桐佐智子編：養護教諭のための保健・医療・福祉系実習ハンドブック、東山書房、13-14、2005
- (4) 日本養護教諭養成大学協議会FD委員会：養護教諭養成大学等における養護実習・病院実習の実情と課題、2008年度日本養護教諭養成大学協議会FD委員会活動報告、2009
- (5) 大谷尚子他：養護教諭養成教育における「臨床実習」の意義、茨城大学教育学部紀要（教育科学）56号、329-247、
- (6) 宮城由美子他：養護教育科における臨床実習—その問題点と課題一、九州女子大学紀要、40(2)、71-83、2003
- (7) 藤井寿美子：養護教諭の臨床実習において学生に何を学ばせるか、第55回日本学校保健学会講演集、168、2008
- (8) ウヴェ・フリック：質的研究入門（小田博志他訳）、237-241、春秋社、2004
- (9) 永石喜代子・米田綾夏：学生と共につくる実習のあり方、鈴鹿短期大学紀要28号、109-121、2008
- (10) 飯田澄美子他：養護活動の基礎、家政教育社、221、1988
- (11) 中央教育審議会：チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について（答申）、平成27年12月21日
- (12) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申）、平成20年1月17日
- (13) 本田優子他：教育学部養護教諭養成の臨床実習に対する卒業生のニーズ、学校保健研究45、102-120、2003